2021年 10月 3日 説教要約　「御霊なる主」(コリント人への手紙 第二　3章18節)

序論：現代の聖書学者たちは、御霊なる主を「三位一体のシンデレラ」と呼ぶ。なぜなら、御霊なる主は御父と御子と異なり、神学論議の場にさえ取り上げられないからである。それがまるで、二人の姉とは異なり、舞踏会の場へ行けずに取り残されてしまうシンデレラのようだというわけである。的を得ている例えだ。

私たちは御霊なる主をどう位置付けているだろうか。このお方は私たちの礼拝を受けるに相応しいお方である。なぜなら、聖書・福音・キリスト者・教会は、このお方によって存在するようになったからである。そうであるがため、私たちは今日も、このお方の働きをみことばから教えられ、このお方にひれ伏す者とさせて頂きたい。

移行：大都市コリントの町に建てられたコリント教会。ここに集うキリスト者たちは賜物を豊かに持っており、あらゆる知識に通じていた。しかしながら、彼らはそれを隣人や教会のために用いようとしない。むしろ、賜物によって武装した自分を誇り、自らを他者よりも高い位に置いていた。これが御霊なる主から出たものであると言えるだろうか。ヒッポのアウグスティヌスは、神様についての論を展開した後、御霊なる主について次のように結論付けている。「神の賜物は愛である。神の賜物は御霊である。よって、御霊は愛である」。

コリント人への手紙の著者である使徒パウロにおいても、御霊なる主がどういうお方なのかをよく知っていたのであろう。「たとえ人の異言や御使いの異言で話したとしても、**愛がなければ**、騒がしいどらや、うるさいシンバルと同じです」(1コリ13:1)。「たとえ預言の賜物を持っていても、**愛がないなら**、無に等しいのです」。従って、「いつまでも残るのは信仰と希望と愛。その中で一番すぐれているのは**愛**」(同14:13)　なのである。「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません」。たとえ異言で話し、預言をしたとしても、その結ぶところの実が分裂や党派心、自慢であるならば、それらの賜物は御霊なる主から出たものであると言えないのかもしれない。御子イエス様に愛され、救われた者たちが、イエス様のからだなる教会を自ら引き裂こうとしている。自分を誇ることで礼拝の霊的ないのちを失わせ、教会の交わりを引き裂こうとしている。パウロはそんな状況を見て、どれほど胸痛ませたことだろうか。

本論：パウロはそうしたコリント教会に今日の手紙を書き送った。主題は「御霊の働き」である。今日のみことばは、その中心とも言える3章の、結びのことばである。「これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」。ギリシャ語原文では、「これこそまさに、御霊なる主から出るものである」。異言を語ることや預言をすること、奇跡を行う力、癒やしの賜物。それらを超えて、「主と同じかたちに姿を変えられていく」こと。これこそまさに、御霊なる主から出るものである。イエス様ご自身が証しをされた通り　(ヨハネ16:14)、御霊なる主は、私たちをイエス様に向かわせて下さるお方である。私たちの関心を、イエス様の栄光を現すことに向けさせて下さるお方である。私たちの信仰生活を、イエス様をより愛する生活へと導いて下さるお方なのである。主と同じかたち、すなわちイエス様のご性質について、パウロはガラテヤ人への手紙で列挙している　(ガラテヤ5:22-23)。御霊なる主が与えてくださるこのご性質は、一見すると異言の賜物や奇跡の力と比較して目立たないもののように思う。しかし、自分を賜物で武装するよりも、異言で語り、奇跡を行うことよりも、主と同じかたちを帯びることこそ、キリスト者としてより大切なのかもしれない。愛、喜び、平安、寛容、親切…。イエス様のような歩みを成すことこそ、すでに救いに与った者としての、愛と感謝と服従の生活だからである。何より、こうした内側の性質を通してこそ捕らわれ人は解放され、霊的な目が開かれ、イエス様を見るからである。パウロはイエス・キリストを宣べ伝えた　(Ⅱコリント4:5)。私たちも自分の姿を通してイエス様を宣べ伝え、イエス様のためにお仕えする者とさせて頂きたいのである。

では、私たちはどのようにして「主と同じかたちに姿を変えられていく」のだろうか。パウロは今日の箇所で、キリスト者の成長に不可欠なことを伝えている。おもに、「鏡に映すように見続ける」、「主の栄光」、「御霊なる主」の３つである。

1　鏡に映すように見続ける：パウロは「鏡のように」ということばをわざわざ挿入している。正確には「鏡に映すように」となる。パウロが「鏡」ということばを用いて伝えたかったこと。それは、鏡というのは正面に置かれた対象物をそのまま映すということである。鏡は対象物が正面に置かれることで初めてその対象物を映す物である。そして、実在しているありのままを映し出すのである。「覆いを取り除かれた顔に、主の栄光を鏡に映す」。新改訳2017の欄外注において「見る」という動詞が補われている。つまり、パウロが言わんとしていることは、自分の顔を鏡として、その鏡に主の栄光をしっかり映すように正面から見続けるということである。パウロは、「主の栄光が映るように」ではなく、「主の栄光を映すように」とことばを慎重に選んでいる。「顔」が行為者である。つまり、対象物である主の栄光が自動的に、私の顔という鏡に映ってくるのではない。私たちが鏡という自分の顔に、主の栄光を映すのである。私たちは主を信じ、キリスト者として生活しているが、主の栄光を忘れてしまうようであるならば、そこに成長はないのかもしれない。

2　主の栄光を：主と同じかたちに姿を変えられていくために不可欠なものの２つ目は、「主の栄光」である。どこか漠然としているが、主の栄光とは何だろうか。(18節の背景にある)　旧約の時代、主の栄光を見る者は生きたまま立ちおおすことは出来なかった。預言者モーセでさえ、神と語り合うときにはその栄光を見ないように自分の顔に覆いをかけられた。ところが、新約時代に生きる私たちは主の栄光を見続けることができる。それも顔に覆いをかけることなく、自由に見ることが赦されている。なぜならそれは、神が人となって下さったからである　(ヨハネの1:14)。つまり、主の栄光を見るとはイエス様を見るということである。御霊なる主は、どこまでも徹底して私たちをイエス様に向かわしめる。イエス様は「いのちのことば」(1ヨハ1:1)　である為、私たちは聖書のみことばを正面から見続けるということがパウロの使信である。パウロは聖書を「キリストを知る知識の香り」(2:14)、「キリストの御顔にある神の栄光を知る知識の輝き」(4:6) と表現している。以上より、「主の栄光を自分の顔に鏡に映すようにして見る」とは、イエス様を知る知識の香り、神の栄光を知る知識の輝きを自分自身のうちに増し加え続けることであると言うことが出来る。聖書のみことばを抜きにして変えられていくことは決して無いことを私たちは覚えたい。

3　御霊なる主：聖書に向かう際に気をつけなければならないことがある。パウロのことば選びは慎重である。気をつけなければならないことは、主動詞が受身形であるということ。私たちは自分の力で変わろうとすると疲れてしまう。「自力で変わる」のではなく「変えられる」のである。「栄光から栄光へ」ということばも、キリスト者の成長が人間のわざによってでないことを表している。また、主動詞が受身形であるということと合わせて、継続的行為として記されている点も重要である。「変えられ続ける」ということ。聖書において、義認を表す「救われた」という類のことばは瞬間的行為を表す時制が使われいる。しかし、聖化を表現する今日の箇所は、変えられ続けるという継続的行為を示す時制になっている。少しずつ、少しずつ、贖いの完成である再臨の時まで「変えられ続ける」のである。

　では、何が、みことばに向かい続ける私たちを変え続けてくれるのだろうか。「それはまさに、御霊なる主の働き」である。御霊なる主。今日の説教題とさせて頂いた。旧約聖書では潤い・いのちをもたらす「風・息・力」に例えられた。新約聖書で「もう一人の助け主」と呼ばれている　(ヨハネ14:16)。御父のもとから御子を通して遣わされる御霊は「助け主」である。「主」であるから単なる物質ではなく、御父・御子と同じように感情をお持ちのお方である。「助け主」とはギリシャ語で「パラクレートス」と言う。パラ (傍に) クレートス (呼ぶお方)。つまり、パラクレートス「助け主」とは「傍に呼んで下さるお方」を意味する。

結論：御霊なる主は、私たちの内で今も働いて下さっている。私たちがみことばの正面にひざまずくよう促して下さり、みことばを読む時もことばにならないうめきをもってとりなし続けて下さるのである。助け主なる御霊が、罪深い私たちを、御父と御子の傍に呼び続けて下さる。私たちはこのお方の愛の働きをどれほど意識し、崇めているだろうか。「御霊を消してはいけません」(1テサ5:19)。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです」(エペ4:30)。今週一週間も、御霊なる主の働きにより頼みつつ、みことばに取り扱われ続ける歩みを献げて参りたい。